

日本語身体ことばにおける身体部位の比喩的機能*

大塚容子

Body-Part Phrases and Metaphorical Functions of Body Part in Japanese

Yoko Otsuka

Abstract

Body parts are metaphorically used in various ways in Japanese. Some of these uses reflect culturally bound Japanese ways of perception. For instance, the head is regarded as a cutting instrument, the face as power, or influence, the eyes as experience, and the mouth as a drum. Interestingly, the belly is a very important organ for Japanese people, as Japanese people regard the belly as the organ in which their mind, thoughts, or ideas are contained.

Received Apr. 27, 1994

Key words : metaphor, metonymy, metaphorical functions, body-part phrases, culturally bound Japanese ways of perception

1. はじめに

大塚(1994)では、身体部位をその要素の一部にもち、身体部位の動作や様態を描写した表現を、本名(1992)に従い「身体ことば」と呼んだ。そして、動作、様態の実行可能性という観点から身体ことばを身振り表現と修辭的表現とに大別し、さらに身振り表現をタイプA~Cの3種類に、修辭的表現をタイプD、Eの2種類に分類した。

ここで考察の対象とするのは修辭的表現の一つであるタイプEの身体ことばである。これは、身体部位の意味が抽象化され比喩的に用いられているため文字通りの意味はなく、あるのは慣用的な意味だけである。例えば、「口を割る」は実際に何か道具を使って人間の口を割るという動作を表わす表現としてではなく、犯人などが白状をするという意味の慣用表現として用いられる。このような意味の慣用化には、山梨(1988)が指摘するように「比喩的な

見たて」(p.49)が働いていることがある。しかし、元々は比喩的な見たてが働いていたとしても、日常の言語使用の中では一旦慣用化された表現に対してその比喩性を意識することはまれである。

本稿では慣用的意味で用いられる、タイプEの身体ことばにおける身体部位の比喩的機能についての考察を試みる。そうすることによって、日本語において各身体部位がどのように認識されているか、身体部位にどのような意味付けがなされているかが明らかになり、そこから日本人の身体部位に対する認識のし方、つまり一種の日本人の価値観を浮かび上がらせることができると考えるからである。まず、意味の慣用化と比喩の問題について検討し、次に頭、顔、目、口、腹の身体ことばにおける各部位の比喩的機能について考察する。

2. 意味の慣用化と比喩

2. 1. 比 喩

普通、比喩という言葉を知ると、文学における修辭的な表現技術の一つであって、日常言語とは全く無縁のものだという印象を受ける。しかし、Lakoff and Johnson (1980) は如何に比喩的なものの見方が日常言語の使用に反映されているかを豊富な言語資料に基づいて示している。以下に彼らの主張を基に日常言語における比喩について説明する。

2. 1. 1. 隠 喩 (Metaphor)

隠喩とはAということがらをBということがらの枠組みを使って認識すること、ならびにその言語表現と理解する。そしてその認識の基盤にはA、B間に存在する機能、性質、形状等の類似性による連想があると考えられる。

Lakoff and Johnson (1980) は次のような表現を挙げて、英語では議論が戦争に見立てられていると述べている(下線筆者)。

〈ARGUMENT IS WAR (議論は戦争である) ⁽¹⁾〉

He attacked every weak point in my argument.⁽²⁾

(彼は私の主張の弱点をすべて攻撃した。)

I demolished his argument.

(私は彼の主張を破壊した。)

I've never won an argument with him.

(私は彼との議論で勝ったことがない。)

He shot down all of my arguments.

(彼は私の主張のすべてを撃ち落とした。)

His criticisms were right on target.

(彼の批判はまさに的を射ていた。)

Your claims are indefensible.

(同書, p.4)

(あなたの主張は守れない。)

「Attack (攻撃する)」、 「demolish (破壊する)」、 「win (勝つ)」、 「shoot down (撃ち落とす)」、 「right on target (まさに的を射る)」、 「indefensible (守れない)」はまさしく戦争を語る時に用いられる表現である。これらの表現が議論を語る時に用いられるということは、議論が戦争に見立てられているからにはほかならない。議論におけるこれらの表現が慣用化してしまっているために、その隠喩に気づかないだけなのである。これらの表現からわかることは、少なくとも英語文化では議論は戦争という枠組みによって認識されているということである。これがレイコフとジョンソンのいう、日常言語における隠喩である。

2. 1. 2. 換 喩 (Metonymy)

換喩とはAということがらとBということがらとの間に「実体上の関係」(『日本語百科大事典』, p.875)があるものである。実体上の関係として、作者と作品、容器と中身、付属物と主体等が挙げられる⁽³⁾。

①何としてもピカソを一点手に入れたい⁽⁴⁾。

②寒い夜はみんな鍋をつつくのがいい。

③雨の日の公園では色とりどりの傘が楽しそうに遊んでいた。

①ではピカソという画家によってピカソの描いた絵を、②では鍋という容器によって鍋の中の食べ物を、③では傘という付属物によって傘をさしている子供を指し示している。

「実体上の関係」の特殊な例として部分と全体という関係がある⁽⁵⁾。あるものの部分によって全体を表わすのである。身体ことばには、部分と全体という関係の換喩に基づく表現が幾つかある。「頭(数)を揃える」、「顔が揃う」、「口を減らす」において身体部位である頭、顔、口はその部位をもつ人間を表わしている。ただ、ここで注意しなければならないことは各々の表現においてどの部位に着目して人間を表わしているかということである。「頭(数)を揃える」では頭は、認知体系が収められている部位であることから、仕事遂行能力をもつ人間を表わしている。「顔が揃う」は顔がその人の象徴として使用されていることに注目した表現であり、「口を減らす」は口が食べ物を取り入れる器官であることに注目した表現である。

2. 2. 意味の変化

歴史的な意味の慣用化は意味の変化と捉えることができる。その変化の発端に比喩が関係している場合がある。比喩が発生源になっていても、長い年月の間にその用法が慣用化され、ある特定の意味をもつようになると、意味の変化と解釈される。そこには意味の「拡大」が見られる。例えば「椅子の背」、「椅子の腕」、「椅子の脚」等の表現は椅子を人間に見立てることによって生じたものだと考えられる。人間に見立てたといっても、胸、腰といった身体部位は使われていない。人間の身体部位との形状、機能の類似性によって、背、腕、脚が選ばれ、現在では椅子のある部分を表わす言葉としてそれぞれ辞書に記載されている。「入口」、「出口」、「財布の口」等も人間の口との機能、形状の類似性に着目して発展した表現である

う。

2. 3. 選択制限の違反

隠喩は意味論的には選択制限の違反と考えることができる。選択制限とは述語がどのような種類の名詞句と共起できるかという意味的な条件のことである。(* は非文であることを示す。)

- ④ 太郎が子供を連れてきた。
- ⑤ 太郎が犬を連れてきた。
- ⑥ * 太郎が本を連れてきた。

「連れる」という動詞は [生物] という素性をもつ名詞句をその目的語に要求する。⑥が非文であるのはこの選択制限に違反しているからである。

この点を踏まえて 2. 1. 1. の〈ARGUMENT IS WAR〉の隠喩を考えてみる。動詞「attack」は本来、目的語の名詞句に要塞や敵軍といった攻撃の対象となる物を要求し、「demolish」は古い建物など、破壊できる物を要求する。また、「win」には戦闘、戦争、競技といった勝負の決まる事がらが必要である。「Argument」そのものは攻撃されたり、破壊されたり、勝負が決まったりするものではない。それにもかかわらず 2. 1. 1. の表現が正しく解釈されるのは、「argument」が攻撃を受けたり、破壊されたりするものとして、つまり戦争と同じ素性をもつものとして認識されているからである。

3. 身体ことばにおける身体部位の比喩的機能

日常言語における比喩を前節で述べたように捉えると、身体ことばにおいても「比喩的な見たて」が潜んでいることは容易に想像できる。以下、頭、顔、目、口、腹の比喩的機能を英語との対応関係を考慮に入れながら考察する。

3. 1. 頭

頭には主に次のような比喩的機能がある。

① 〈頭は容器である〉

「頭に入れる」 大事なことですからちゃんと頭に入れておいてください。

② 〈頭は機械である〉

「頭を使う」 この問題を解決するためには頭を使わねばならない。

「頭を働かす」 ちょっと頭を働かせれば、すぐにわかることだ。

「頭の回転がいい」 昨日十分な休養をとったせいか、今日は頭の回転がいい。

「頭の回転が速い」 部長はとて頭回転の速い人なので、一緒に仕事をすると大変だ。

③ 〈頭は切る道具である〉

「頭が切れる」 頭の切れる人にはどこか冷たいところがあるとよく言われる。

「頭が鈍い」 あれだけ言ってもわからないとは、頭が鈍い。

④は「入れる」という動詞が用いられていることからわかるように、頭を認知体系が収められている容器に見立てている。

⑤は「頭の回転がいい／速い」という表現が示すように、頭を回転する機械に見立てた表現である。回転の善し悪しによって処理能力、理解能力の速さを表わしている。また、考え方を変えることを機械のスイッチの切り替えと捉えた「頭を切り替える」がある。「頭がさびついて動かない」、「頭の充電」等という表現を聞いて即座に理解できるのはこの比喩が生きているからである。

優れた能力を表わす「頭が切れる」(⑥)では頭の良さが切る道具に喩えられている。優れた能力の持ち主を指して「あの人は剃刀だ」と表現することさえある。

Lakoff and Johnson (1980) は英語には <THE MIND IS A MACHINE (精神は機械である)> (p.27), <IDEAS ARE CUTTING INSTRUMENTS (考えは切る道具である)> (p.48) という隠喩が働いていると述べている。⑦, ⑧は各々の例である (下線筆者)。

⑦My mind just isn't operating today.

Boy, the wheels are turning now! (同書, p.27)

⑧That was cutting remark.

He's sharp. (同書, p.48)

日本語、英語共に人間の知力や能力を機械や道具に見立てているが、日本語では知能の存在する頭を見立ての対象にしている。そして「頭がいい／悪い」においては「頭は知能である」という比喩が成立している。英語にも「head」が知能を指す言葉として使われることがあるが、英語では「自己抑制の場、精神のバランス感覚や分別の場といった要素が強」(『しぐさ』, p.447) く、知能よりはむしろ精神と関係づけられているようである。日本語における知能に焦点が当てられた頭の捉え方との間には若干違いが見られる。

表1は頭の比喩的機能をまとめたものである⁽⁶⁾。(表には換喩も含めて記す。)

表1 頭の比喩的機能

| 部 位 | 比喩を生み出す要素 | 比 喩 |
|-----|-----------|--------------|
| 頭 | 形状の類似性 | 容器 |
| | 機能の類似性 | 回転する機械 |
| | 性質の類似性 | 切る道具 |
| | 実体上の関係 | 人間 知能, 能力 |

3. 2. 顔

顔の主な比喩的機能を以下に示す。

① <顔は看板である>

- 「顔を貸す」 ちょっと顔を貸してくれないか。
「顔を売る」 あそこの社長は顔を売るのがうまい。
- ⑥ <顔は誇り、名誉である>
「顔を潰す」 人の顔を潰して平気なのか。
「顔を立てる」 私の顔を立てると思って、この仕事を引き受けてもらいたい。
- ⑦ <顔は力である>
「顔が利く」 あの劇場には顔が利くので、少しぐらいの無理なら言える。
「顔が広い」 顔が広い鈴木さんに頼んでみよう。

目や口には各々物を見る、食べ物を取り入れるといった、その器官固有の機能があるが、顔は目、鼻、口等の存在場所であって、顔そのものに特別の機能があるわけではない。だが顔は人間の感情、人となりが表われる、最も目立つ部位であるために、人間の象徴として機能する。本人であることを証明する書類（身分証明書や運転免許証等）に必ずといっていいほど顔写真が貼付されているのはまさにこの理由による。顔が指し示すものは人格的存在である。このことは「自分の顔に責任をもつ」という表現にも表われている。さらに凶々しさ（人格に関わる要素）を表わす表現として「大きな顔をする」があるが、ここに顔が用いられていることもその証拠になろう。名詞句として新人を表わす「新顔」、その反対語の「古顔」がある。

「顔が人間の代表である」という考え方が一般化されると、顔は人間以外の存在物の代表にもなる。「玄関は家の顔だ」、「社長は会社の顔だ」等がその例である。玄関に一步足を踏み入れた時にその家の雰囲気を一瞬のうちに感じ取り、また社長の態度や話し方から社風を感じ取っているであろう。

⑧において顔を「貸し」たり「売った」りできるのは、顔を一個の立体的な存在物として認識しているからである。そして、それは看板として機能する。看板には似顔絵が描かれている。看板を大量に出せば、その人の名が知れわたり有名になるわけである。「顔を売る」の類義表現に「名を売る」がある。

顔は人格をもった人間を表わす。人格という点に焦点が当たると顔が人格や名誉を代表するようになる。それが「顔を潰す」、「顔を立てる」(⑥)である。そして、看板である顔に人格、名誉が表われると考えることによって、無形である人格、名誉を存在物として認識することが可能になる。その結果、顔は「潰」せるようになるのである。

英語にも日本語と類似した表現、「save face (顔を立てる)」、「lose face (顔をつぶす、面目を失う)」があるが、『新英和大辞典』によると「lose face」は中国語「tiu lien 丟臉」の英訳である。

⑦は看板の(影響)力を表わした表現である。「顔が広い」は力の及ぶ範囲に言及している。これに関連した表現として「顔パス」、「顔で買う」がある。いずれも自分の影響力によって

金銭を使うことなく目的を達成させることができるのである。

表2に顔の比喩的機能を示す。

表2 顔の比喩的機能

| 部 位 | 比喩を生み出す要素 | 比 喩 |
|-----|-----------|--------|
| 顔 | 実体上の関係 | 人間 |
| | | 名誉, 誇り |
| | 機能の類似性 | 看板 |
| | | 影響力 |

3. 3. 目

目の比喩的意味は目の機能に基づくものが多い。

① <目は見ることである>

「目が届く」 仕事が多くて、細かいところまで目が届かない。

「目をそらす」 私の姿を見ると、彼はすっと目をそらした。

② <目は識別力である>

「目が利く」 これが贗物だとわかるとは、さすがに目が利く。

「目が肥える」 彼は自分も絵を描くせいか、絵画には目が肥えている。

③ <目は経験である>

「ひどい目にあう」 海外旅行に行ったら、病気になる、パスポートはなくす、スーツケースは壊れる、ひどい目にあった。

「つらい目にあう」 何かつらい目にあっているのだろうか、最近様子がおかしい。

④ <目は表現手段である>

「目が物を言う」 彼女は何も言わなかったが、目が物を言っていた。

「目が笑う」 真面目な顔をして会議に出席していたが、目が笑っていた。

目の機能は見ることである。①の比喩は目の機能に基づいたものである。見ることを目で表現している。見ることは場合によって注意をはらうことであったり、心をかけることであったりする。注意したり心配しているからこそ、見るのである。目が見ることに喩えられている身体ことばは数が多い。「目をかける」、「目を配る」、「目を注ぐ」、「目を離す」、「目を引く」、「目につく」、「目に触れる」等、枚挙に暇がない⁽⁷⁾。英語にもこの比喩に基づく表現がある（「keep an eye on（目を離さない）」、「take one's eyes off（目を離す）」（『新英和中辞典』等）。

②は見て判断する力、すなわち識別力、鑑識眼を表わしている。他に「目が高い」、「（見る）目がない⁽⁸⁾」、「（見る）目がある」等がある。英語にも鑑識眼があるという意味を表わす言い方として「have an eye for」（前掲書）がある。「目がいい」、「目が悪い」は生物学的な見る力、視力を示している。

㉔から、経験は見ることによって始まるという考えが窺える。自分の目を見たこと(事態)が経験になるのである。修飾要素が経験を特定する。一般には悪い意味で用いられることが多い。

「目は心の窓」、「目は口ほどに物を言い」という表現にも示されているように、目は人間の感情、思いが表出される部位である。このように考えると、目は口や顔と同様、表現手段(㉔)として機能する。

以上まとめると表3のようになる。

表3 目の比喩的機能

| 部 位 | 比喩を生み出す要素 | 比 喩 |
|-----|-----------|----------|
| 目 | 実体上の関係 | 見ること |
| | | 視力 |
| | | 識別力, 鑑識眼 |
| | | 経験 |
| | 機能の類以性 | 表現手段 |

3. 4. 口

口には二つの機能がある。一つは食べ物を取り入れる機能、もう一つは音(声)を発する機能である。㉔, ㉕は前者の機能に基づくもの, ㉖, ㉗, ㉘, ㉙は後者の機能に基づくものである。

㉔ <口は味を感じる能力である>

「口が肥える」 最近の子供はおいしい物ばかり食べているので口が肥えていて困る。

「口がおごる」 口がおごっている人には何をご馳走すればいいのだろう。

㉕ <口は物の入る／収まる場所である>

「口を切る」⁽⁹⁾ 一度口を切ったお菓子は早く食べた方がいい。

㉖ <口は太鼓である>

「口を叩く」 大きな口を叩く前に自分でやってみることだ。

㉗ <口は機械である>

「口が回る」 まだよく口の回らないような子供が一生懸命何かを言おうとしている。

㉘ <口は車である>

「口に乗る」 噂はみんなの口に乗ってあっという間に広がった。

㉙ <口は言葉である>

「口を出す」 若い人のやることにあまり口を出さない方がいい。

「口をはさむ」 二人で話し合っている時に口をはさまないでもらいたい。

㉔ <口は貝である>

「口を割る」 容疑者は警察の取り調べになかなか口を割らなかった。

食べ物を口に入れるのは生命を維持するためであるかもしれないが、人間には食べ物を味わう能力がある。実際に味覚を感じるのは口ではなく舌であるが、食べ物の味覚を感じる舌の能力を口で表わしている (㉔)。「舌が肥える」という言い方もある。

㉔の口は人間の口ではなく、物を出し入れする場所、あるいは物の収まる場所を表わしている。人間の口が食べ物を取り入れる場所であるということから生じたものであろう。ただし、「口を切る」は動作の後の結果を表現したもの、つまり切った後に口のような穴状のものができていることを捉えて表現したものである。「就職口」、「働き口」は口の意味が抽象化されたものである。英語にも同じ見立てがあり、「the mouth of a bag (袋の口)」（『アンカー』）という言い方が可能である。

口にはもう一つ、音を発するという機能がある。この点に注目したのが㉔である。口を音を発する楽器、太鼓に見立てているために口は「叩く」ことができるのである。発せられる音（内容）は口の修飾要素によって示される（「大きな口を叩く」、「生意気な口を叩く」、「むだ口を叩く」等）。

（言語）音が連続すると言葉になる。言語能力は人間にのみ与えられた能力である。人間は言葉を発することによって意思の疎通を行う。このように考えると、言語音を発する口はコミュニケーションをするための一種の道具だと言える。㉔における道具は回転する機械である。なぜなら、一般に「回る」という動詞は回転する物体を主語に要求するからである。口の中の舌の動きは機械の回転を連想させる。事実、「舌が回る」という言い方も可能である。「口が重い」、「口が軽い」も口を機械に見立てた表現として挙げることができる。機械をうまく回転させるためには油が必要である。油の切れた機械（口）の回転は重いし、逆に十分に油がさしてある機械（口）の回転は軽い。「口が重い／軽い」は人の話し方を機械の回転に見立てた表現と言えよう。

㉔の道具は車である。「口車に乗る⁽¹⁰⁾」という表現の存在がその証拠になるであろう。口は言葉を人から人へと運ぶ車なのである。

㉔においては口は、口から発せられた言葉そのもの、あるいは言い方を表わしている。この他に「口がうまい」、「口が悪い」等がある。この見立てによる名詞句に「口数」、ことわざ「口は禍の門」がある。英語でも「have a foul mouth (口ぎたない)」（『アンカー』）という言い方があり、口が言葉に見立てられている。

口の形状は（二枚）貝に酷似していることから、㉔における口は貝に見立てられている。貝の中身はもちろん言葉である。「口がかたい」人の口から中身（言葉）を取り出すことは困難である。

表4は以上をまとめたものである。

表4 口の比喩的機能

| 位 位 | 比喩を生み出す要素 | 比 喩 |
|-----|-----------|------------|
| 口 | 実体上の関係 | 人間 |
| | | 味を感じる能力 |
| | | 言葉 |
| | 機能の類似性 | 物の出入りするところ |
| | | 太鼓 |
| | | 機械 |
| | | 車 |
| | 形状の類似性 | 貝 |

3. 5. 腹

腹には次のような比喩的機能がある。

㉑ <腹は容器である>

「腹におさめる」 この話は君の腹だけにおさめておいてほしい。

「腹を割る」 腹を割って話し合おう。

㉒ <腹は精神, 考えである>

「腹を読む」 相手の発言の中から腹を読まなければならない。

「腹をさぐる」⁽¹¹⁾ 相手の本心がわからず, お互いに腹のさぐり合いをしていた。

㉑において「腹を割った」り, 「腹におさめた」りできるのは腹を容器に見立てているからにはかならない。この他に「腹に落ちる」, 「腹に一物(ある)」という表現も存在する。これは腹が胃や腸など、大事な内臓の入っているところを表わすことから生じたものだと考えられる。

㉒は容器の中身⁽¹²⁾に言及している。では容器の中身とは何だろうか。人間にとって大事なもの、つまりその人の精神、本音である。腹の中にあるその人の考えは、ある時には書物のように「読んで」理解することができ、またある時には「さぐら」なければわからないのである。「腹が黒い」人とは邪な考えをもっている人のことである。「腹を決める」, 「腹を見透かす」等とも言える。さらに、口と関連して「口と腹とは違う」という興味深い表現もある。口から発せられる言葉は「建前」, 「本音」は腹の中にあるということだろうか。腹に関する言葉は「腹芸」, 「腹積もり」, 「腹の虫がおさまらない／承知しない」等色々ある。これら一連の表現は、日本語では精神や本音は頭にではなく、腹にあると認識されていることを示している。

表5はまとめである。

表5 腹の比喩的機能

| 部 位 | 比喩を生み出す要素 | 比 喩 |
|-----|-----------|--------|
| 腹 | 機能の類似性 | 容器 |
| | 実体上の関係 | 精神, 考え |

4. お わ り に

英語との対照をまじえながら、五つの身体部位の比喩的機能について検討した。原則として考察の対象を身体ことばに限っているため、ここで取り上げたものがすべてではないが、日本人の身体部位の認識のし方がある程度浮き彫りにされた。そして英語と比較すると日・英語間には次のような共通点、相違点が見られることがわかる。

(1)日本語、英語に共通する比喩は(a)器官の機能に基づくもの、例えば口と言葉、目と視線、(b)部分と全体の関係に基づくもの（顔で人格を表わす）である。これらは関係づけが明確で理解しやすい。実質的な関係に基づくものであるため、言語普遍的な比喩ではないかと思われる。

(2)口と言葉を運搬する車、顔と自分を有名にする看板、腹と本音がおさまっている容器という関係には日本語における身体部位の認識のし方が表われていると言えるだろう。日本人にとって口は車であり、顔は看板であり、腹は容器なのである。顔が看板として認識されるのは日本語社会では顔がその人間の象徴的存在として機能しているからである。また、発せられた言葉に最大の価値が置かれている言語社会では、腹が本音のおさめられている容器であるという隠喩は成立しないであろう。発せられた言葉は本音ではないという認識があってはじめて腹をさぐったり読んだりすることが可能になるのである。このように身体部位の認識のし方は言語社会の習慣、文化と密接な関係をもっているのである。

本稿では日本語の身体ことばの比喩的機能を抽出し、それと英語との対応関係を調査したただけだが、英語の身体ことばを分析すれば英語独特の比喩的機能が発見されるであろう。最後に今後の課題として次の2点を挙げておく。

- (1)調査対象とする身体部位を増やす。
- (2)各身体部位の比喩的機能の多言語間比較を行う。

謝辞 本原稿を読み、的確な指摘をしてくださった青山学院大学の本名信行教授に心からお礼申し上げます。

*本稿は Otsuka, Yoko, “Metaphorical Expressions of Body Parts in Japanese” (a paper presented at a nonverbal communication panel of the 3rd International Cross-Cultural

Communication Conference, National Cheng Kung University, Tainan, Taiwan, R.O.C., April 1-6, 1991, as part of a joint study, titled “A Functional Analysis of Body-Part Phrases and Expressions in Japanese” by Nobuyuki Honna, Mihoko Kato, Yoko Otsuka and Hiroko Hashimoto) をもとに加筆修正したものである。

注

- (1) 『レトリックと人生』(1986, 渡部他訳)を参考しているが、断りのない限り日本語訳は筆者によるものである。また〈〉は比喻であることを表わす。
- (2) 例文の提出順序は原文通りではない。
- (3) 山梨(1980)は「換喩的な関係の典型例」として以下のものを挙げている。
- | | | |
|----------|---------|---------|
| 容器 — 中身 | 材料 — 製品 | 主体 — 手段 |
| 主体 — 付属物 | 作者 — 製品 | 原因 — 結果 |
- (pp.93-94)
- (4) 日本語の例文はすべて筆者の作成したものである。
- (5) 部分と全体という関係が成立するものを特に提喩 (synecdoche) と呼んで、換喩と区別することもある。比喻の厳密な分類が本稿の目的ではないので、提喩は換喩の特殊な例とここでは理解しておく。
- (6) ここで扱わなかった表現に「頭に浮かぶ」, 「頭に描く」がある。これらは各々思い出すことや想像することを, 「浮かぶ」や「描く」を用いて表現したもので, 表現に修辭性が感じられるが, 頭は頭として認識されていると考えられる。従ってタイプEではなくタイプDの身体ことばと解釈する。「目に浮かぶ」等も同様である。
- (7) ここに列挙しなかったものに「目に入る」がある。「目に入る」は以下に示すように意味が曖昧である。
- ⑨ごみが目に入った。
- ⑩鈴木さんの姿が目に入った。
- ⑨は文字通りの意味, ⑩は慣用表現としての意味で用いられている。この種の身体ことばは身振り表現のタイプCに属すると考えるので, 本稿の考察の対象にはならない。しかし, 慣用表現として用いられるということは, そこに意味の抽象化が見られるということである。慣用表現としての意味だけを考えると, 目が視界に見立てられていることがわかる。そして, 「入る」という動詞の選択制限を考えると視界という無形のものが容器に見立てられているということになり, 〈目は容器である〉という隠喩が成立することになる。Lakoff and Johnson (1980) によると英語には〈VISUAL FIELDS ARE CONTAINERS (視界は容器である)〉(p.30) という比喩的概念がある (下線筆者)。
- ⑪The ship is coming into view.
(船が視界の中に入ってくる。)
- I have him in sight.
(視界の中に彼をとらえた。)
- (8) 「目がない」には「夢中になるほど好きである」(『ルーツ』, p.386) という意味もある。これは「判断できないほど好きである」と解釈できるだろう。
- (9) 「口を切る」は最初に発言するという意味で用いられることもある。この用法の場合は修辭的表現のタイプDに属すると考える。口が何かに見立てられているのではなく, 口として認識されていると考えられるからである。
- (10) 「口に乗る」と「口車に乗る」は意味が違うが, 「口車に乗る」という表現が存在することは口を車に見

日本語身体ことばにおける身体部位の比喩的機能

立てることの傍証になると考えられる。また、『ルーツ』には「[口車] (巧みな話し方) は、うまく言い回すことから「車」にたとえた語」(p.151) とある。

- (11) 『国語慣用句辞典』には「腹をさぐる」の第1義として「診療や治療などのために腹を手でさぐる」(p.191) とあり、この文字通りの意味を認めれば「腹をさぐる」はタイプCの身体ことばになる。
- (12) ①は隠喩と換喩の両方が関係している。まず腹を容器に見立て(隠喩)、次に容器と容器の中身を関係づけている(換喩)。

引用文献

- 『アンカー英和辞典』柴田徹士編(1972) 学習研究社
『国語慣用句辞典』白石大二編(1969) 東京堂出版
『しぐさの英語表現辞典』小林祐子著(1991) 研究社
『新英和大辞典』第4版 市河三喜他編(1960) 研究社
『新英和中辞典』第4版 岩崎民平他監修(1977) 研究社
『日本語百科大事典』金田一春彦他編(1988) 大修館書店
『ルーツでなるほど慣用句辞典』(1991) 集英社
大塚容子(1994)「身振りと身体ことば—日本語教育の立場から」『聖徳学園岐阜教育大学紀要』第27集
本名信行(1992)「身振りと身体ことば」『月刊言語』21巻1号 大修館書店
山梨正明(1988)『比喩と理解』(認知科学選書17) 東京大学出版会
Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphors We Live By*, The University of Chicago Press

参考文献

- 『広辞苑』第3版 新村出編(1983) 岩波書店
『日本語大辞典』梅棹忠夫他監修(1989) 講談社
『国語大辞典』金田一春彦他編(1978) 学習研究社
『例解慣用句辞典』井上宗雄監修(1992) 創拓社
池上嘉彦編(1985)『意味論・文体論』(英語学コース4) 大修館書店
秦 恒平(1984)『からだ言葉の本』筑摩書房
前田富祺(1982)「和語の意味変化」『講座日本語学4 語彙史』明治書院
宮地敦子(1982)「身体語彙の歴史」『講座日本語学4 語彙史』明治書院
森田良行(1987)『日本語をみかく小辞典〈名詞篇〉』講談社
森田良行他編(1989)『ケーススタディ日本語の語彙』桜楓社